

岩波の『世界』の11月号に、東京大学名誉教授の高橋哲哉氏が、興味深い「終わりなき歴史責任 欧州の現在と日本（下）」を寄稿している。櫻井よし子氏と高市早苗氏が、対談書『ハト派の嘘』で下記のようなやり取りをしている。高市：「植民地支配が全部悪いのだとすれば、アメリカもイギリスもフランスもオランダも、謝罪しなければいけません。でも、他国はそうしていません。」櫻井：「他国は日本のような『謝罪外交』などしていません。」植民地支配は、「列強」は皆やっていたことで、「悪い」ことではなかった。だから「謝罪」などはしていない。日本だけが「悪い」として「謝罪外交」をしてきたが、そんな「自虐史観」は終わりにしようと主張している対談である。

これに対し、高橋氏は、植民地支配をしてきた欧州6ヶ国の謝罪表明による歴史に責任を負う姿を明示して、彼女たちの「フェイク発言」あるいは「無知」を指摘している。謝罪表明に感銘を受けたので、それらの一部を紹介したい。

オランダのウィレム・アレクサンダー国王は2020年、訪問中のインドネシアでオランダ軍の行った虐殺について謝罪した。「過去は消し去ることができず、各々の世代が順番にそれを引き受けていかなければなりません。（中略）わが国の政府がすでに発しているいくつかの声明とともに、私はあの時代にオランダが行使した過度の暴力について、遺憾の意を表明し謝罪いたします。（中略）私は今日、インドネシア国民に心からの謝罪を表明いたします。私たちのもとでは、眼をそむけ、責任逃れをし、見当違いの優越感に浸る植民者の感覚が支配的だったのです。」ベルギーのフィリップ国王は、2022年にコンゴを訪問し、下記のスピーチを述べた、「多くのベルギー人がコンゴとその人びとに対して誠実にかかわり、好意を持っていましたが、植民地体制そのものは搾取と支配に基づくものでした。この体制は不平等で、それ自体として正当化できず、父權的温情主義と差別と人種主義を特徴とするものでした。そこから収奪と辱めとが惹き起こされたのです。（中略）植民地化のシステムは、深刻な人権侵害とあらゆる種類の差別、そして、ベルギー人によるアフリカ人へのまったく不適切な見方をもたらしてしまったのです。」ドイツのシュタインマイヤー大統領は2022年、植民地問題が問われる民族学博物館で、下記の講演を行っている。「植民地支配の時代にドイツ人が犯した不正は、社会としての私たち皆にかかわることです。（中略）植民地支配の時代の犯罪、征服、抑圧、搾取、略奪、何万もの人びとの殺害は、私たちの記憶のなかに相応しい場所を必要とします。私たちはドイツの歴史のこの部分の前で、責任に向き合わなければならないのです。」フランスのマクロン氏は2017年の大統領選挙期間中、アルジェリア訪問の時、下記のように語った。「植民地化はフランスの歴史の一部です。それは人道に対する罪であり、真の野蛮なのです。それは私たちが正面から向き合うべき過去の一部をなしています。私たちが被害を与えた人たちに対しては、謝罪をすることが必要です。」これらの謝罪表明は皆、ごく最近に出されたものである。植民地化は遠い過去のことでなく、終わりなき、現在の歴史責任の問題であると表明している。高橋氏は論考を「『戦後民主主義』の遺産継承が問われる今、日本の植民地支配責任への問いを広く深く立て直すことが求められている」と結んでいる。

日本国憲法は戦争の惨禍が生み出したものであるが、アジア諸国を蹂躪したことへの謝罪、贖罪を含んだものであると、私は理解している。戦争を放棄し、また、近隣諸国への謝罪による和解を求める現憲法は、国際平和を実現する光になるのではないか。